

令和4年度 公立小松大学入学者選抜試験  
一般入試（中期日程）試験問題

# 小 論 文

【国際文化交流学部】  
国際文化交流学科

（注意事項）

- 1 問題用紙は指示があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は本文4ページです。答案用紙は2枚です。
- 3 答案用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入しなさい。
- 5 アルファベット文字や数字は、1マスに1字で記入しなさい。
- 6 字数制限のある解答については、句読点を1字と数えること。
- 7 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

I. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

(A)「よむ」という営みは、文字を追うこととは限らない。 ころを、あるいは空気を「よむ」ともいう。句を詠む、歌を詠むともいう。「詠む」は、「ながむ」とも読む。『新古今和歌集』の時代、「眺む」には、遠くを見ることだけでなく、異界の光景を認識することを指した。

本を読むというときにさえ私たちは、そこに記号を超えた何かを認識している。表記されている奥に隠れた意味があることを感じている。行間を読むとは、そうしたことを、どうにか言葉にしようと思った者が思い至った表現なのだろう。「よむ」という言葉には、どこか彼方の世界を感じとろうとする働きがある。

その一方で、(B) 懸命に読もうとしたときに、いっこうに「よめて」こないこともある。 本を開き、書かれている事実を読み過ぎないように、不明なことは調べ、懸命に読むのだが言葉の扉が開かない。何かにさえぎられるような心地がする。

重大な発見があるのではないかと強く身構えるとき、その人の中で、ほとんど無意識的に「重大なもの」が設定されてしまう。そして、その想定から外れるものを見過ごす。安易な未来への予想は、想像を超えてやってくる、未知なる出来事の到来を邪魔しているのかもしれない。

本当に探しているものが何であるか、本当に必要なものがどんな姿をしているか、人は知らないことが多い。また、望んでいるものが、望んでいるかたちをして顕われるとは限らない。世界は、意味ある機会に満ちている。人生を創造するような邂逅を妨げているのは、私たちの意図と計画なのかもしれないのである。

越知保夫（1911～1961）という批評家がいる。小林秀雄論をはじめ、日本の古典から近代フランス哲学までを射程にいれ、それまでになかった文体と調べをもって登場した人物だった。だが彼は、病に倒れ、一冊も著書を世に問うことなく、49歳で亡くなった。彼は「よむ」、あるいは認識するときの死角にふれ、次のように書いている。

歴史的見地にせよ、心理学的見地にせよ、人間を上から眺めている人は、自分が同じ人間であることを忘れている。その人の立っている場所からは、物がよく見えるかもしれない。が、見えすぎるのである。[パスカルの]『パンセ』が我々をつれて行く場所は、そのような高みではない。パスカルは我々をもっと低い場所へ導く。もっと空気の濃密な場所へ。

（「小林秀雄論」）

現代人は情報を取り入れることに忙しく、不可視なものを「よむ」ことを忘れ、ひたすら多くのことについて知ろうとしている。「よむ」とは、単に文字を追うことではなく、むしろ、越知のいう「低い」、「空気の濃密な場所」へ赴き、言葉の奥にひそむ意味

を発見することではないだろうか。

空気は目に見えない。しかし、私たちは全身でその存在を感じている。「よむ」ときも目や頭だけでなく全身を開放して言葉に向き合わなくてはならない。

(C) 読むことは、書くことに勝るとも劣らない創造的な営みである。 作品を書くのは書き手の役割だが、完成へと近づけるのは読者の役目である。

作品は、作者のものではない。書き終わった地点から書き手の手を離れてゆく。言葉は、書かただけでは未完成で、読まれることによって結実する。読まれることによるのみ、魂に語りかける無形の言葉になって世に放たれる。読み手は、書き手とは異なる視座から作品を読み、何かを創造している。書き手は、自分が何を書いたか、作品の全貌を知らない。それを知るのはいつも、読み手の役割なのである。

(出典：若松英輔著『悲しみの秘義』ナナロク社、2015年、18-22頁。なお本文中の漢字に付されたふりがなはすべて表示を略した。)

[問1] 下線部(A)で、「「よむ」という営みは、文字を追うこととは限らない。」と書かれている。では、「よむ」とはどのようなことか。文中から、端的に表現している箇所を抜き出して、20字以内で答えなさい。

[問2] 下線部(B)に関して、なぜそのようなことが起こると筆者は考えているか。本文を踏まえ、150字以内で説明しなさい。

[問3] 下線部(C)に関して、本文全体を踏まえたうえで、なぜ読むことは創造的な営みなのか、また、創造的に読むということはどのようなことかについて、400字以内で自分の考えを述べなさい。

## II. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

私たちの幸福を支えるのは、自然環境、経済環境、社会関係など、多岐にわたる。一方でこうしたものは常に安定的に存在しているわけではない。安定的・持続的に人の幸福を支える要因を維持させるためには、努力も必要になってくる。

一つは、地球資源の分配にまつわる、長期的ビジョンの構築が必要であろう。もしも現時点での近視眼的かつローカルな幸福ばかりを追い求めるとすれば、利他的な意思決定が繰り返され、周囲にある環境での評価には注意が払われにくくなり公共財問題が発生しやすくなる。それを回避するためには、個人が自分の欲求の充足のみを幸福の拠り所とするのではなく、(A) 長期的で広い視点に立った関係思考が必要になる。個人の幸福追求モデルは、個人間の競争と達成がひいては社会全体の利益を生み出すという資本主義モデルと連動したものであるが、これがうまく循環する条件は、個人間の競争が「共有地の悲劇」に代表されるようなマクロ環境へのダメージによる共貧状態をもたらさないこと（資源が豊富にあると想定される状態）である。しかし地球資源を考慮すると、この条件が成立することは非常に稀であろう。

もう一つは、「幸福を感じる力」の育成も必要であろう。経済成長が国民の幸せを支えるという理屈が浸透し、経済成長という目標設定がデフォルト化、一定の経済活動の拡大を目指してきた。たしかにそれらは非常に重要ではあるが、イースターリンのパラドックスから示唆されるように、「要件がそろっていれば必ず人は幸福を感じる」というものではない。むしろ、一定の要件が満たされていても幸福を感じる人が出来ない人は多くいる。ブータンでは、経済発展以外の側面も重視し、文化や精神性あるいは自然環境が失われないことを重視している。そしてこの政策は、発展途上国のみならず先進国を含めた世界各国の一つのロールモデルとして機能しはじめている。

(B) 幸福を支える要件と、幸福を感じる力は別物である。時に「要件」の上昇が「感じる力」を削いでしまうこともあり、幸福を感じる力を育てることは簡単なことではない。実際、多くの国は増大する個人の欲求と供給とのバランスをとることに對して成功を収めているとは言いがたい。日本においては、幸福を満たすとされる「要件」は世界的にみても相当に高ランクに位置する。インフラが整い、情報を容易に入手でき、医療設備も整っているとともに、文学やメディアなどの文化も発達している。しかし、幸福を感じる力は衰えているかもしれない。

消費文化においては「個人」の幸福の要件に注意が向けられやすい。実際に、個人の幸福の要件に特化した幸福度指標が世界で普遍的に用いられていくことは、果たして(C) 地域固有な自然や文化に基づいた持続可能な社会づくりに資するものであるだろうか。

持続可能な社会を実現するためには、世代を超えてどのように幸福を受け継ぐのか、また、自分（自分たち）さえよければよいという考えだけではなく、他の地域に暮らす人々との横のつながりや影響を視野に入れる必要がある。日本においては、バランス志

向に根ざした集合的幸福観と、持続可能な幸福につながる智慧が存在している。こうしたモデルを日本が国際社会のなかで積極的に提言する役割を担うことが今こそ求められているのではないだろうか。

注>イースターリンのパラドックス:一定程度の経済水準に達すると、GDPの上昇と主観的幸福感の関連がみられなくなること。

(出典：内田由紀子著『これからの幸福について 文化的幸福観のすすめ』、新曜社、2020年、144-145頁)

[問1] 下線部(A)に関して、筆者はなぜ「長期的で広い視点に立った関係思考が必要になる」と考えているのか、その理由を100字以内で述べなさい。

[問2] 下線部(B)に関して、筆者は「幸福を支える要件」と「幸福を感じる力」の関係性についてどのように考えているか、150字以内で述べなさい。

[問3] 下線部(C)に関して、あなた自身が考える「地域固有な自然や文化に基づいた持続可能な社会づくり」とはどのようなものか、300字以内で述べなさい。